

[成果情報名] 茶芽の出開度による収量及び品質の推計

[要約] 茶の生育ステージにおいて、茶芽の出開度と生葉収量、荒茶中の全窒素含有率およびNDF含有率には相関が見られ、圃場で出開度を調査することで、生葉収量、荒茶中の全窒素含有率、およびNDF含有率を推計することができる。

[キーワード] チャ、出開度、生葉収量、全窒素含量、NDF含量

[担当] 農林技術開発センター 農産園芸研究部門 茶業研究室

[連絡先] (直通) 0957-46-0033

[区分] 茶

[分類] 指導

[背景・ねらい]

近年、茶の価格は上級茶と下級茶の二極化が進んでおり、生産現場では、市場の動向等により、生葉収量と荒茶品質を考慮しながら、茶葉の摘採・製造を行っていく必要がある。そこで、一番茶の被覆及び無被覆栽培による摘採時期と、製茶した荒茶品質の関係を明確にするため、摘採時期や原葉形質の違いによる荒茶成分との関連性について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 一番茶芽の被覆栽培、無被覆栽培共に出開度と生葉収量には正の相関が見られ、出開度から生葉収量を推計することができる(図2、表1)。
2. 一番茶芽の被覆栽培、無被覆栽培共に出開度と、茶のうまみ成分の指標となる荒茶中の全窒素含量(多いほうが品質が優れる)には負の相関が見られ、出開度から荒茶中の全窒素含量を推計できる(図3、表1)。
3. 一番茶芽の被覆栽培、無被覆栽培共に出開度と、茶の外観・形状の指標となる荒茶中のNDF(粗繊維)含量(少ない程茶芽がしなやかで、品質が優れる)には正の相関が見られ、出開度から荒茶中のNDF含量を推計できる(図4、表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 出開度は摘採した茶芽を計測した結果である。
2. 結果は茶業研究室内圃場で、栽培条件は「やぶきた」、年間窒素施用量 45Kg/10a(年間7回分施)、被覆栽培は2010年、無被覆栽培は2009年の結果である。
3. 相関式は、品種間、地域間、栽培条件等により異なるため、各地域等において出開度および荒茶品質の調査、データの蓄積が必要である。

[具体的データ]

* 出開度：茶芽のうち、出開いた茶芽の占める割合 生育後半ほど数値が高い

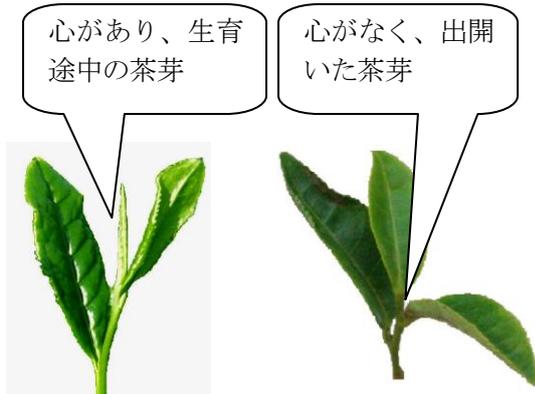


図1 茶芽の出開き

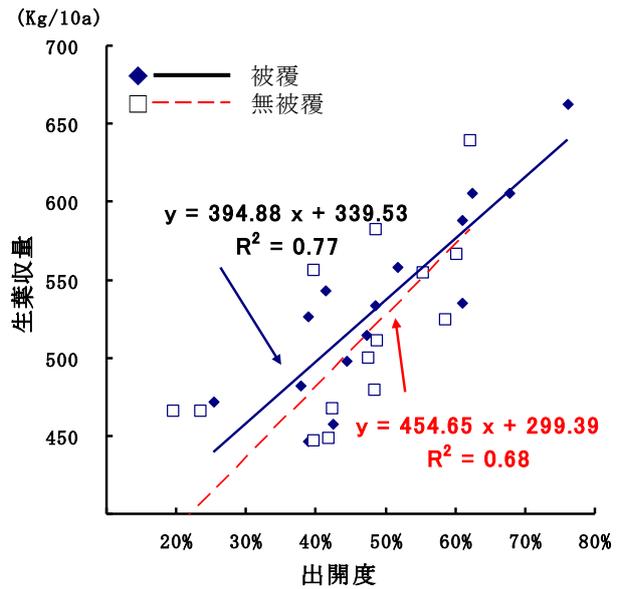


図2 一番茶芽の出開度と生葉収量

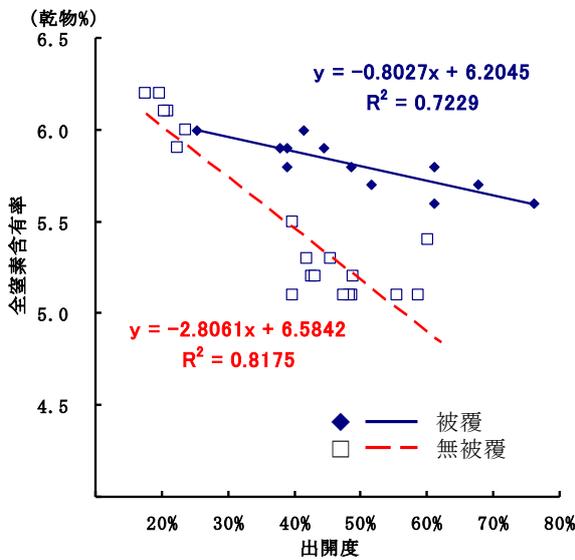


図3 一番茶芽の出開度と全窒素含量

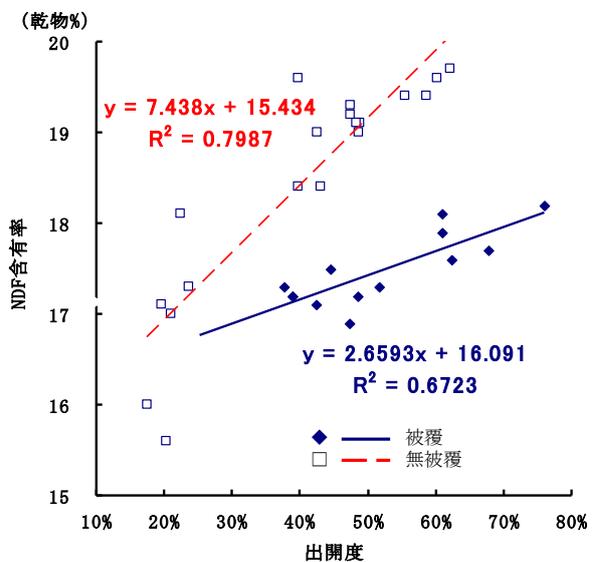


図4 一番茶芽の出開度とNDF含量

表1 一番茶の目標収量と出開度、荒茶成分の推計値

	被覆栽培		無被覆栽培	
	450	650	450	650
目標収量 (Kg/10a)	450	650	450	650
出開度 (%)	28.0	78.6	33.1	77.1
全窒素含量 (乾物%)	6.0	5.6	5.7	4.4
NDF含量 (乾物%)	16.8	18.2	17.9	21.2

[その他]

研究課題名：多用途茶葉大量生産と簡易製造技術の開発

予算区分：県単

研究期間：2007～2011年度

研究担当者：野田政之、宮田裕次